

# Let's Write in Plain English

Plain Englishで英作文

Kelly Itoh  
Toshifumi Miyawaki

SANSHUSHA

## テキストの構成

このテキストは基礎編と応用編に別れており、基礎編で Plain English による表現力を身につけてもらい、それをもとに応用編でさらに実的なものに取り組んでもらうことをねらいとしている。

基礎編では各章の最初に短い日本語の例文と、その typical translation (日本人が書きそうな典型的な英文) があり、その後には → で大きく示されているのが plain English によるモデル英文である。

Exercise は【A】【B】【C】の3種類で、【A】には typical translation と、それを Plain English にする際の clue が与えてある。【B】には clue はなく、さらに【C】は日本語の例文だけとなっている。

## はじめに

日本人がほんとうに通じる英語を身につけようとする時に、大切なことはもちろんいろいろあるが、まず第一に考えなければならないことは、日本語と英語の発想の違いであろう。日本語には日本語の発想があり、英語には英語の発想がある。この事実を無視したままでは、いつまでたってもなかなか通じる英語は書けるようにならないし、また話せるようにはならない。

長く英語をやってはきたが、どうも英語でのコミュニケーションは上達しないところぼす人が多いようだが、こういう人たちには、この当然分かっているはずだと思われる事実が、意外と理解されていないのではないだろうか。どうもこの点ができる人とできない人のひとつの分かれ道になっているようだ。

こんな問題を抱えている学生のために何かいいテキストができないものかと考えていた時に、『キミの英語じゃ通じない』や『分かる英語・通じる英語』などの著者で Plain English を説いているケリー伊藤氏に相談したところ、快く協力を申し出て下さり、このテキストができあがった次第である。

このテキストにおけるわれわれの目的を一言で言えば、日本語の一字一句を英語にしようとする姿勢を改めてもらい、日本語はそのまま英語にならないということを理解してもらいたいことである。今までに学生諸君が学んできた英語がまちがっていたとか、無駄な努力をしてきたなどとは決して考えてもらいたくはない。ただほんとうに通じる英語の習得に向けて、ちょっとした発想の転換を試みてもらいたいだけである。

実際テキストの形にしようすると、難しい点が多くあり、まだまだ不十分なところが多くあるとは思われるが、コミュニケーションのための英語力を身につけたいと思っている学生諸君に、なんらかのきっかけをつかんでもらえれば幸いである。

最後に、応用編の中で小説の中の一部を転載使用することを承諾して下さった作家の方々とその出版社にお礼を申し述べたい。

1990年10月 宮脇俊文

## To the reader

Japanese people translate Japanese into what they think is its English equivalent. The Japanese translate Japanese, word for word, into English when they speak or write English. This means that the Japanese use the signs called English, not the English language.

Equivalent words in two languages are not the rule, but the exception. It is impossible to translate Japanese into English or vice versa. Translation is never done. We can't create English, but English is just there. The best we can do is detach ideas from the original Japanese and express the ideas in English. And Plain English is the best for the Japanese as a means of communication.

Plain English was first developed in the U.S. by Dr. Rudolf Flesch. Plain English is for clarity and efficiency. It is a natural and easy way of saying things. It is for native speakers of English as well as English learners.

Toshifumi Miyawaki, associate professor at Seikei University, is a good friend of mine and an ardent supporter of my Plain English movement in Japan. This textbook is his idea and I have really enjoyed working with him on this project. I am sure that Japanese students of English can see the light with this textbook.

Kelly Itoh

## CONTENTS

### <基礎編>

- Chapter 1 仮定法(1)/6
- Chapter 2 仮定法(2)/9
- Chapter 3 関係代名詞/12
- Chapter 4 受動態/15
- Chapter 5 慣用表現、構文、その他(1)/19
- Chapter 6 慣用表現、構文、その他(2)/22
- Chapter 7 動詞を使う/25
- Chapter 8 余分な語句を省く/28
- Chapter 9 事実や言いたいことを先に述べる/32
- Chapter 10 内容を具体的に表現する/35
- Chapter 11 発想を転換する(1)/39
- Chapter 12 発想を転換する(2)/42

### <応用編>

- Chapter 13 手紙を訳してみよう/46
- Chapter 14 会話文を訳してみよう/52
- Chapter 15 事実を伝える文を訳してみよう/72

## Chapter 1 仮定法(1)

僕が君の立場だったら、同じことをするだろう。

If I were in your position, I would do the same thing.

→ I would do the same thing.

これは典型的な仮定法の構文である。「君の立場」という日本語に、忠実に英文を作ったために、in your position となっているが、これは you だけでじゅうぶんである。「君の立場だったら」ということは、すなわち「僕が君だったら」ということと同じになる。したがってここの if-clause は、If I were you となる。

しかし更に考えてみると、この場合、I would do the same thing. の主語の部分に仮定法の if-clause が含まれていることに注目してほしい。つまり、この主語(I)の中に「僕だったら」の意味が潜んでいるのである。そうなると、ここでは if-clause の部分はなくとも同じことになる。必要のないことをわざわざ言うまで、文章を長くするのは賢明ではない。短くて済むことは短く済ませればよい。長い文のほうが高尚であるなどは決して考えないことだ。

またその他、主語だけではなく、副詞や副詞句に if-clause が含まれている場合もある。



## Exercise

- 【A】 1. If I tried, I could solve the problem.  
(やろうと思えばその問題は解けると思います)

⇨ \_\_\_\_\_

[If I triedが必要かどうか考えてみよう]

2. If he were an American, he would not do that.  
(アメリカ人ならそんなことはしないだろう)

⇨ \_\_\_\_\_

[An American を主語にして考えてみよう]

3. If you were a cautious man, you would not go to such a place.  
(慎重な人ならそんなところへは行かない)

⇨ \_\_\_\_\_

[A cautious man を主語にして考えてみよう]

- 【B】 1. If it had been a hundred years ago, he could have been a great leader.

(100年前だったら彼は偉大な指導者になっていただろう)

⇨ \_\_\_\_\_

2. If I had been by myself, I would not have done that.  
(私ひとりだったら、そんなことはしなかっただろう)

⇨ \_\_\_\_\_

3. If she were here beside me, I would get nervous.

(もし彼女がそばにいたら、僕はあがってしまうだろう)

⇨ \_\_\_\_\_

**【C】** 1. 僕だったらそんなことに驚いたりはしませんよ。

⇨ \_\_\_\_\_

2. あの人ならこの企画に賛成してくれるでしょう。

⇨ \_\_\_\_\_

3. 君と一緒になら行ってもいいですよ。

⇨ \_\_\_\_\_

4. 私には無理ですが、プロの人ならできるでしょう。

⇨ \_\_\_\_\_



## Chapter 2 仮定法 (2)

駅に着いたとき、電車はもう出てしまっていた。途中バスが故障しなかったら、間に合っていたのに。

When I got to the station, the train had already left. But for the breakdown of the bus on the way, I could have been in plenty of time.

→ I couldn't catch the train. My bus broke down on the way.

この日本語からすると、どうしても仮定法を使いたくなるケースだが、これも全体の内容を把握して考えれば、仮定法など全く必要ないのである。「(乗るはずの) 電車に乗れなかった」ということと、「バスが故障してしまった」という二つの事実を言えば、これで状況はすべてわかるはずである。実に簡単なことだ。日本語の一字一句にとらわれないということだけではなく、日本語の構文にもとらわれてはいけないということのいい例である。

また、英語のロジックでは常に「原因・理由」と「結果・言いたいこと」の両方をはっきりと述べるのが鉄則であるが、ここでは「電車に乗れなかった」という結果が先に来て、後に「バスが故障した」という原因が来ている。このように sentence を二つにして、それぞれを別に表現した方が、このロジックはより明確になってくるのである。

## Exercise

【A】 1. You look as if you are thirsty.

(君はのどがかわいているみたいだね)

⇨ \_\_\_\_\_  
[as if を使わずに表現してみよう]

2. If you turn left at the next corner, you will find the post office.

(次の角を左に曲がれば郵便局があります)

⇨ \_\_\_\_\_  
[if-clause を使わずに表現してみよう]

3. If you take a bath, it will improve the circulation of blood.

(お風呂に入ると血液の循環がよくなります)

⇨ \_\_\_\_\_  
[if-clause を使わずに表現してみよう]

【B】 1. If three more persons come, it will be enough.

(あと三人来ればちょうどいい)

⇨ \_\_\_\_\_

2. If you must do your homework sooner or later, you may just as well do it right away.

(どうせやらなきゃならない宿題なら、早く済ませたほうがいい)

⇨ \_\_\_\_\_

3. It seems as if just yesterday that this song was a big hit, but it was actually ten years ago.

(この歌がはやったのはもう十年前のことなのに、私にはまるで昨日のことのようだ)

⇒ \_\_\_\_\_

- 【C】** 1. 魚を焼く時、窓をあけないと火災報知機がなってしまう。

⇒ \_\_\_\_\_

2. 九時までにタイム・カードを押さないと、出勤時間に遅れたことになります。

⇒ \_\_\_\_\_

3. 車に関することならどんなご相談にも応じます。

⇒ \_\_\_\_\_

4. 本当にいい本があれば一日楽しく暮らせる。

⇒ \_\_\_\_\_

## Chapter 3 関係代名詞

海外に行ったことのある私の知人の中で、また行ってみたいと言わない人はほとんどいない。

There are few friends of mine that have been abroad who do not say they would like to go once again.

→ Some of my friends have been abroad.  
Most of them say they want to go again.

日本人は関係代名詞を使うのが好きで仕方がないようだ。これも結局はいくつかの情報を一つの文章にまとめてしまおうとする傾向があることに原因があるのかもしれない。しかしネイティブは実際の会話ではほとんどこの関係代名詞を使わないと言ってよい。もちろん使ってはいけないということではないが、何も無理に文章を複雑にする必要もないのではないだろうか。それよりも、情報別に二つ、あるいは場合によっては三つに切つてしまえば簡単だ。

するとこの場合、「私の知人の中には海外に行ったことのある人がいる」ということをまず言ってから、「彼らのほとんどはまた行きたいと言っている」とすればよい。非常にシンプルにかたづくのである。



## Exercise

- 【A】** 1. There is no one who doesn't love his own country.

(自分の国を愛さない者はない)

⇨ \_\_\_\_\_

[Everybody で始めて、関係代名詞を使わずに表現してみよう]

2. The house whose roof you see beyond the bank is Mr. Tanaka's.

(土手の向こうに屋根が見えるのが、田中君の家です)

⇨ \_\_\_\_\_

[関係代名詞を使わずに、二つのセンテンスにして表現してみよう]

3. I like a building which looks old-fashioned.

(私は古風な感じの建物が好きだ)

⇨ \_\_\_\_\_

[関係代名詞を使わずに、形容詞＋名詞の形で表現してみよう]

- 【B】** 1. It is really surprising that there should be so few people who read books.

(本を読む人がそんなに減っているとは驚きだ)

⇨ \_\_\_\_\_

2. You should not easily trust a man of whose past you know nothing.

(全く素姓のわからない人間を軽々しく信用してはいけません)

⇨ \_\_\_\_\_

3. This is the boy with whom I went to the forest.

(この子は僕が森へ一緒に行った少年です)

⇨ \_\_\_\_\_

【C】 1. 彼には娘がいたが、私は彼女と仲良くなった。

⇨ \_\_\_\_\_

2. 私はその手紙を二回読んで、それから封をした。

⇨ \_\_\_\_\_

3. 彼は25歳の若者だったが、彼に関しては実に様々な意見を聞かされた。

⇨ \_\_\_\_\_

4. 僕はカメラを三つ持っているが、そのうち二つは日本製だ。

⇨ \_\_\_\_\_

## Chapter 4 受動態

この手紙は誰によって書かれたものですか。

By whom was this letter written?

→ Who wrote this letter?

ここでは「誰によって書かれたか」という受動態を、「誰が書いたか」という能動態に直しただけのことである。それではどちらを使ってもいいではないかと考える人もいるだろう。しかしそれは違う。まずこの二つの英文を声に出して言ってみた場合、明らかな違いに気づくはずだ。それはインパクトの強さの問題である。英語の基本的な構文はS + V + Oの形。つまり Somebody does something. これが英語のロジックであり、この言い回しをもっともインパクトが強い。

もちろん、能動態と受動態の両方が存在する以上、それぞれのニュアンスの違いはある。どう違うのかということは一言では説明しきれないが、日本語の場合、「被害、迷惑を被る」といった時に受動態を使うことが多い。たとえば、「雨に降られた」とか、「転動させられた」といった具合にである。とかく日本語では、「される」という言い回しがよく使われるが、こうした被害者のメンタリティーとも言える日本語のロジックは、英語のロジックとは違う。したがって、日本語が受動態だからといって、必ず英語も受動態で表現しなければならないと考えるのはまちがっている。このことだけは覚えておきたい。

日本語で、「～とされている」という表現はよく使う。これをそのまま英語にすれば、It is said that ～となるが、これもわざわざ受動態にしなくても、People say that ～とすればよい。そのほうが、文が生き生きとしてくるはずである。

ただし、英語でも物事をはっきりと言いたくない時は、受動態を使ったりすることがある。アメリカの政治家も時には焦点をぼかすために受動態を用いることがあるらしい。

## Exercise

【A】 1. By whom was this English letter corrected?

(この英語の手紙を誰に直してもらったのですか)

⇨ \_\_\_\_\_

[Who で始めて能動態にしてみよう]

2. He was laughed at by everybody.

(彼はみんなに笑われた)

⇨ \_\_\_\_\_

[Everybody で始めて能動態にしてみよう]

3. One hundred houses were burnt down in the fire which broke out yesterday.

(昨日の火事で百戸が全焼した)

⇨ \_\_\_\_\_

[Yesterday's fire で始めて能動態にしてみよう]

【B】 1. We are taught English by Mr. Smith.

(私たちはスミス先生から英語を習っている)

⇨ \_\_\_\_\_

2. Let it be done at once.

(すぐにそれをしなさい)

⇨ \_\_\_\_\_